

## 表記法について

本連載では、みずからの信仰を進める上での一つの道標として「おふでさき」を読んでいく。それはいかにもオーソドックスな読み方であるが、「おふでさき」を正面切って読むことはそれほど容易いことではない。先の連載が結果的に示しているように、私はそうした態度を養うのに少なくとも3年は費やしている。

「おふでさきを読んで信仰すること」を「電話を使って話をする」と類比して考えると、先の連載では、とりあえず電話を使ってみて、みずからを「話者／通話者」として自覚するに至ったのだといえよう。そこには、電話それ自体が通話の主体ではないことの認識も含まれる。ところで、「通話」というのは電話に関連づけられてこそ成り立つ営みであり、単なる「会話」ではない。したがって、「話者」としての主体性の確立は必ずしも「通話者」の確立を意味しない。電話を必要とし、その特性が把握され、かつ話者としての自己がそこに存したとき、通話者が成立する。つまり、「おふでさき」を読むといっても、単なる「読者」ではなく、「おふでさき」の特性を把握しながら、それを頼りに信仰の道を歩むような「信仰者」の確立が目指されなければならない。先の連載では「読者」（「話者」）の自覚に至ったが、本連載では、さらに「おふでさき」の特性に目を配りつつ、「『おふでさき』に依拠する信仰者」（「通話者」）の確立を目指していきたい。

さて、それでは「おふでさき」の特性とは改めてどのようなものであろうか。まず、それが言語テキストである以上、ある程度の言語学的な考察は不可欠であろう。また、和歌の形式がもつ特殊性も考慮に入れなければならない。そこで、当面は先行研究に依拠しながら、そうした「おふでさき」の言語的な構造やスタイルについて考察し、それから順次、そこでの洞察を基にして「おふでさき」の具体的な箇所について読んでいきたい。

森田義興による「『おふでさき』の国語学的研究1～3」（『<sup>やまと</sup>日本文化

』9、11、15号に所収。以下「国語学」と略す）は、今から約80年前の昭和12、13年の研究で、「おふでさき」の用字法、表記法、音韻、そして語彙や語法まで詳細な考察が及んでいる。まずは、この「国語学」に依拠しながら「おふでさき」の表記法および音韻について確認していきたい（なお変体仮名の入力の都合上、用字法については差し当たって割愛する）。

### 【表記法】

表記法とは言葉を文字や補助記号をつかって表すときのきまりであるが、「おふでさき」のそれと現代のそれとは同じではない。「国語学」では、「おふでさき」における長音、拗音、促音、半濁音の表記の仕方と、踊り字について記されている。長音とは母音を伸ばした音で、今日では母音を添えて表記されたり（「くうぎ」「かあさん」など）、外来語では長音符（「ー」）が使われたりしている（「カラー」など）。拗音とは「子音＋半母音＋母音」の構造をもつ音節で、今日ではヤ行とワ行（ただしワ行は方言的）の仮名を小さく添えて表記される（「ぎゃ」「くわ」など）。促音とはつまる音で、現代表記では「っ」で記されている（「けっこう」など）。半濁音とは日本語において「p」を含む音節で、今日では「ぱ」「ぴ」などと半濁点（゜）で表記されている。「国語学」では、「おふでさき」の「>」という踊り字の用いられ方も合わせて考察されている。

#### （1）長音表記法

「国語学」では、内容上の区分として便宜的に「体言／体言以外」「方言的表現」「韻律的關係」に分けられている。韻律的關係とは、和歌の形式に準ずるために音が延ばされるときを表記である。

- ・ 体言：「やまべこほり」「ほふ」など
  - ・ 体言以外：「とほる」「うたがうて」など
  - ・ 方言的表現：「まあす」「たあには」など
  - ・ 韻律的關係（延音）：「てえ」「ねえ」「いぎなみい」など
- また、こうした区分は母音を基準にすれば以下のように説明されている。

- ・ ア列長音：「まあす」「たあ」などの「あ」
- ・ イ列長音：「きい」「いぎなみい」などの「い」
- ・ ウ列長音：「ゆう事」「どうゆうみち」などの「う」
- ・ エ列長音：「かしこねへ」「せゑぢん」などの「へ」および「ゑ」
- ・ オ列長音：「をふく」「けいこふ」「をもをて」の「ふ」および「を」。ただし、オ列音の下の「ふ」は「オ」と発音される。つまり、「をもう」は「オモウ」、「をもふ」は「オモオ」となる。

#### （2）拗音表記法

拗音では子音と母音の間に半母音YやWが入るが、「おふでさき」では、W系は「おうくわんみち」のみで、Y系が以下のように表記されている。なお、「国語学」では「けふ」（「きよ」と表記されていない）は慣習的な表記法とされる。

- ・ Y系ア韻：今日と同じ表記で「いしや」「たいしや」など。拗長音はない。
- ・ Y系イ韻：なし
- ・ Y系ウ韻：「りゆけ」「しゆせ」など拗音には「ゆ」が用いられ、「ぎうば」「にんじう」など拗長音には「う」が用いられている。
- ・ Y系オ韻：「どちよ」「きよたい」など拗音（拗長音）では「よ」が用いられる。「よう」ではないのは、「オ」音が発音上自然と余韻を含むためであろうとされている。

#### （3）促音表記法

「おふでさき」において促音は、上部の語の母音を書き添えることで表記されている。

- ・ 「けへこふ」の「へ」はエ音で促音表記
- ・ 「こ>ち」の「>」はオ音で促音表記
- ・ 「こふち」の「ふ」はオ音で促音表記

ただし、「国語学」では「せきぎよ」は「せへきよ」と表記されるべきところが、拗音「きよ」の影響で「へ」が「き」となったのであろうと推察されている。また、「一寸」は仮名書きでは「ちよと」で、「ちよ」が拗音であるためにこの表記。「しゆつせ」となるべき、「しゆせ」も同じ理由であるとされる。

#### （4）半濁音表記法

半濁音は、「おふでさき」では特別な表記法をもたず、濁音もしくは清音で表記されている。

- ・ 「しんぱい」「しんはい」「てんび」「たあふり」など

#### （5）疊音符としての踊り字「>」

踊り字「>」は、すぐ上の一音が反復される疊音符として使用されている。それは、「に>ん」「ま>に」などの同一単語内における疊音や、「いま>で」「その>ち」など異なる単語間における疊音に区別される。ただし、「国語学」では、「せへつ>」は上部の子音ではなく母音だけを反復し、「こ>ち」も同様で、オ音を表し、促音表記となることが確認されている。